

島根県立大学出雲キャンパス
紀要 第15巻, 35-43, 2019

学生の授業経験・学習態度や能力・知識の獲得状況から みたA大学における看護教育の現状 ～ 2017年度 IR コンソーシアム標準調査から～

吾郷美奈恵, 高橋恵美子, 岡安 誠子, 小田美紀子,
小林 洋貴, 山下 一也

概 要

A大学では、大学 IR コンソーシアムの正会員となり、ベンチマーク可能な標準調査として位置づけられた学生生活調査を全学生に行い、教学 IR (Institutional Research) の取組を推進している。今回の目的は、学生の授業経験・学習態度や能力・知識の獲得状況から A 大学における看護教育の現状を明らかにすることを目的とした。また、その結果を IR コンソーシアムの基礎集計結果と比較し、A 大学の特徴について検討する。

回答のあった 307 票（協力率 91.4%）について分析した結果、A 大学看護学科の現状や大学 IR コンソーシアム結果の比較から、次のことが特徴と考えられた。

- 全ての学年で主体的に学び、看護に役立つ知識やスキルを学ぶ授業を経験している。
- TA や SA の活用は難しい現状にあるが、教員が添削やコメントなど丁寧な授業運営を行っている。
- 授業態度は悪くはないが、各学年に一定程度の欠席、遅刻、居眠りはある。
- 能力・知識の多くを学年進行に伴って獲得しているが、外国語や数理的な能力・知識は増えていない。
- 授業態度が良く、能力・知識が増えた者は成績順位上位者である。

我が国においては、看護教育の質評価・質保証に必要な資源（人・設備・費用）等、これから体制整備がされていく状況にあるが、IR 機能に着目し、教育の質を客観的に保証するとともに、更なる教育改善の方策を見出すことが重要である。

キーワード：看護教育, 大学 IR コンソーシアム, 学生調査, 教育アセスメント

I. 緒 言

近年、“教育ビッグデータ”“学習ビッグデータ”と表現されるように、大学において

も多種多様なデータが大規模に蓄積され、IR (Institutional Research) 部門が相次いで設置されている¹⁾。一方、看護学の学士課程教育は、1991 年の大学設置基準の大綱化、1992 年の看護師等の人材確保の促進に関する法律が制定され、その告知の中で看護系大学・大学院の整備

島根県立大学

充実を一層推進していく必要があることが明記された。その後、看護系大学は増加の一途を辿り、2019年度は272校・入学定員24,525人となり、2018年5月現在において大学は看護師学校・養成所入学定員の34.9%を占めている²⁾。また、学士課程における看護基礎教育は、総合大学の1学部あるいは学科に位置づいている場合が多く、取得可能な資格も様々であることから、分野別質評価・質保証の意義は大きい。また、看護基礎教育課程での到達度と卒業後に求められる看護実践能力との連動性が乏しいことなどの課題解決に向け、2017年10月に看護学教育モデル・コア・カリキュラムが策定・公表され、教育の質保証に向けた検討が重ねられることが期待されている³⁾。

IRは、アメリカにおいて1960年代に注目されるようになり、IRの全国協会（Association for Institutional Research）は“（組織としての）大学の理解、戦略、運営の改善につながる研究”と定義している⁴⁾。また、IRには様々な定義が存在するが、高等教育における教育質保証においてIRが果たす役割や課題を教育・学習に関するデータを扱う“教学IR”が注目されている⁵⁾。A大学においては、2017年度に大学IRコンソーシアム（The Universities Institutional Research Consortium）の正会員となり（以下、コンソーシアムと略す。）、ベンチマーク可能な標準調査として位置づけられた、学生生活調査を行っている。

今回は、学生の授業経験・学習態度や能力・知識の獲得状況からA大学における看護教育の現状を明らかにすることを目的とした。また、その結果をIRコンソーシアムの基礎集計結果と比較し、A大学の特徴について検討する。

Ⅱ. 方 法

A大学看護学科の全学生を対象に、2017年度の大学IRコンソーシアムの標準調査を11月下旬から12月上旬に行った。調査は、IRを担当する特別委員会委員が実施しており、そのデータを倫理的配慮の下に所定の手続きを経て分析した。

分析に用いた内容は、学年、成績順位、授業経験（14問）、授業態度（14問）、能力・知識（20問）である。また、授業経験と授業態度は、[1:まったくなかった/しなかった] [2:あまりなかった/しなかった] [3:ときどきあった/しなかった] [4:ひんぱんにあった/しなかった] 4枝択一、能力・知識は、[1:大きく減った] [2:減った] [3:変化なし] [4:増えた] [5:大きく増えた] の5枝択一で回答を求めた。

分析にはIBM SPSS 22 (2) を用い、授業態度と成績順位の関係や能力・知識と学年の関係はSpearman ノンパラメトリック検定を行った。また、各項目の集計結果は大学IRコンソーシアム会員校全体の標準調査結果と比較して考察した。

Ⅲ. 倫理的配慮

大学IRコンソーシアムの標準調査は、A大学看護学科のあるキャンパスの特別委員会が担当し、調査の趣旨等を記載した依頼文書と口頭で説明し、自由意思による協力を求めている。説明に併せて調査票を配布し、提出箱への自主提出によって同意と判断している。

研究に用いる分析データは、A大学看護学科のあるキャンパス管理者の承諾を文書で得、学籍番号等の個人が識別できるデータを削除するなど、所定の手続きを経て担当者から提供を受けた。本研究は、島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（申請番号256）。

Ⅳ. 結 果

回答のあった307票（協力率91.4%）について分析した。

1. 授業経験について

授業経験の学年別評価を表1に示した。「実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が主体的に学ぶ」「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」「定期的に小テストやレポートが課せられる」は1・2年生の数名を除き、各学年とも「ひんぱんにあった」「ときどきあった」と評

表1 授業経験の学年別評価

	学年 (n)	まったく なかった n (%)	あまり なかった n (%)	ときどき あった n (%)	ひんばんに あった n (%)
実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が主体的に学ぶ	1 (86)		3 (3.5)	37 (43.0)	46 (53.5)
	2 (71)			41 (57.7)	30 (42.3)
	3 (79)			23 (29.1)	56 (70.9)
	4 (71)			12 (16.9)	59 (83.1)
仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ	1 (86)		1 (1.2)	18 (20.9)	67 (77.9)
	2 (71)			25 (35.2)	46 (64.8)
	3 (78)			22 (28.2)	56 (71.8)
	4 (68)			14 (20.6)	54 (79.4)
授業内容と社会や日常のかかわりについて、教員が説明する	1 (86)	1 (1.2)	11 (12.8)	44 (51.2)	30 (34.9)
	2 (71)		13 (18.3)	45 (63.4)	13 (18.3)
	3 (79)		12 (15.2)	49 (62.0)	18 (22.8)
	4 (71)	2 (2.8)	12 (16.9)	37 (52.1)	20 (28.2)
授業の一環でボランティア活動をする	1 (85)	36 (42.4)	32 (37.6)	15 (17.6)	2 (2.3)
	2 (71)	4 (5.6)	27 (38.0)	34 (47.9)	6 (8.5)
	3 (79)	5 (6.3)	39 (49.4)	32 (40.5)	3 (3.8)
	4 (71)	16 (22.5)	29 (40.8)	24 (33.8)	2 (2.8)
学生自身が文献や資料を調べる	1 (86)		1 (1.2)	22 (25.6)	63 (73.3)
	2 (71)		10 (14.1)	31 (43.7)	30 (42.3)
	3 (78)		3 (3.8)	25 (32.1)	50 (64.1)
	4 (70)		5 (7.1)	12 (17.1)	53 (75.7)
定期的に小テストやレポートが課せられる	1 (85)		1 (1.2)	34 (40.0)	50 (58.8)
	2 (71)		1 (1.4)	33 (46.5)	37 (52.1)
	3 (79)			13 (16.5)	66 (83.5)
	4 (71)			18 (25.4)	53 (74.6)
教員が提出物に添削やコメントをつけて返却	1 (86)	1 (1.2)	11 (12.8)	49 (57.0)	25 (29.1)
	2 (71)	3 (4.2)	25 (35.2)	31 (43.7)	12 (16.9)
	3 (79)		6 (7.6)	28 (35.4)	45 (57.0)
	4 (70)		1 (1.4)	30 (42.9)	39 (55.7)
学生が自分の考えや研究を発表する	1 (86)	1 (1.2)	16 (18.6)	44 (51.2)	25 (29.1)
	2 (71)	1 (1.4)	20 (28.2)	39 (54.9)	11 (15.5)
	3 (79)		3 (3.8)	46 (58.2)	30 (38.0)
	4 (71)		5 (7.0)	35 (49.3)	31 (43.7)
授業中に学生同士が議論をする	1 (86)		11 (12.8)	41 (47.7)	34 (39.5)
	2 (71)	1 (1.4)	14 (19.7)	47 (66.2)	9 (12.7)
	3 (79)	1 (1.3)	3 (3.8)	36 (45.6)	39 (49.4)
	4 (70)		3 (4.3)	26 (37.1)	41 (58.6)
授業で検討するテーマを学生が設定する	1 (85)	23 (27.1)	39 (45.9)	18 (21.2)	5 (5.9)
	2 (71)	19 (26.8)	40 (56.3)	12 (16.9)	
	3 (79)	5 (6.3)	28 (35.4)	39 (49.4)	7 (8.9)
	4 (71)	7 (9.9)	35 (49.3)	23 (32.4)	6 (8.5)
授業の進め方について学生の意見が取り入れられる	1 (86)	15 (17.4)	49 (57.0)	19 (22.1)	3 (3.5)
	2 (71)	7 (9.9)	46 (64.8)	18 (25.4)	
	3 (77)	8 (10.4)	36 (46.8)	30 (39.0)	3 (3.9)
	4 (71)	7 (9.9)	30 (42.3)	28 (39.4)	6 (8.5)
取りたい授業を履修できなかった	1 (86)	74 (86.0)	12 (14.0)		
	2 (71)	51 (71.8)	16 (22.5)	3 (4.2)	1 (1.4)
	3 (79)	59 (74.7)	15 (19.0)	3 (3.8)	2 (2.5)
	4 (71)	59 (83.1)	12 (16.9)		
出席することが重視される	1 (85)	1 (1.2)	12 (14.1)	39 (45.9)	33 (38.8)
	2 (71)	2 (2.8)	10 (14.1)	34 (47.9)	25 (35.2)
	3 (79)		4 (5.1)	34 (43.0)	41 (51.9)
	4 (71)	1 (1.4)	9 (12.7)	38 (53.5)	23 (32.4)
TAやSAなど授業補助者から助言を受ける	1 (84)	40 (47.6)	29 (34.5)	15 (17.9)	
	2 (60)	15 (25.0)	32 (53.3)	13 (21.7)	
	3 (76)	19 (25.0)	34 (44.7)	22 (28.9)	1 (1.3)
	4 (58)	21 (36.2)	20 (34.5)	16 (27.6)	1 (1.7)

価していた。「授業内容と社会や日常の関わりについて、教員が説明する」「出席することが重視される」「学生自身が文献や資料を調べる」は全ての学年の8割以上が「ひんぱんにあった」「ときどきあった」と評価していた。また、2年生は「教員が提出物に添削やコメントをつけて返却」を「まったくなかった」「あまりなかった」と4割が評価しており、他の学年に比べて多かった。「授業の一環でボランティア活動をする」を「ひんぱんにあった」「ときどきあった」と評価した割合は、1年生は少なく、2・3年生で多かった。一方、「学生が自分の考えや研究を発表する」「授業中に学生同士が議論する」「授業で検討するテーマを学生が設定する」「授業の進め方について学生の意見が取り入れられる」は1・2年生より3・4年生が「ひんぱんにあった」「ときどきあった」と評価した割合が多かった。「取りたい授業を履修できなかった」「TAやSAなど授業補助者から助言を受ける」は「まったくなかった」「あまりなかった」と評価した割合が多かった。

2. 学習態度について

学習態度の学年別評価を表2に示した。「授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした」は「ひんぱんにした」「ときどきした」と全ての学年で8割以上が評価し、「教職員に学習に関する相談をしたり、学内の学習支援室を利用した」は、学年が上がるほど「ひんぱんにした」「ときどきした」と評価していた。「授業課題のためにWeb上の情報を利用した」と評価しているものが各学年とも多く、「インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした」は1・2年生が3・4年生より「ひんぱんにした」「ときどきした」と評価した。「提出期限までに授業課題を完成できなかった」「授業に遅刻した」は、学年が上がるにつれ「ひんぱんにした」「ときどきした」と評価した者は微増したが、「授業中に居眠りをした」「授業を欠席した」は各学年で違いはなかった。一方、「授業をつまらなく感じた」と各学年1～2割程度「ひんぱんにした」と評価していたが、「授業中、教員の考えや意見に異議を唱えた」は「まったく

しなかった」「あまりしなかった」と評価しており、4年生は「ひんぱんにした」「ときどきした」と評価した者はいなかった。また、「大学の教職員に将来のキャリアの相談をした」は3・4年生に、「単位とは関係のない教員あるいは学生による自主的な勉強会に参加した」は4年生に「ひんぱんにした」「ときどきした」と評価した者が多かった。「教員に親近感を感じた」は「ひんぱんにした」は各学年とも数名であったが、4年生に「ときどきした」と評価した者が多かった。

学習態度と成績順位の相関関係では、成績上位者ほど「授業課題のために図書館の資料を利用した」($p < .01$)、「大学の教職員に将来のキャリアの相談をした」「教員に親近感を感じた」($p < .05$)と評価していた。一方、成績下位者は「提出期限までに授業課題を完成できなかった」($p < .01$)、「授業を欠席した」($p < .01$)、「授業に遅刻した」($p < .01$)、「授業をつまらなく感じた」($p < .01$)、「授業中に居眠りをした」($p < .01$)、と評価していた。

3. 知識・能力について

知識・能力を「大きく増えた」「増えた」と評価した割合を学年別に表3に示した。4年生で「大きく増えた」「増えた」割合は、「専門分野や学科の知識」100%、「分析力や問題解決能力」91.6%、「コミュニケーションの能力」90.1%、「他の人と協力して物事を遂行する能力」90.0%、「卒業後に就職するための準備の度合い」88.8%、「コンピュータの操作能力」87.3%、「地域社会が直面する問題を理解する能力」87.2%、「人間関係を構築する能力」84.5%、「一般的な教養」83.1%の順に多かった。反面、「大きく増えた」「増えた」が4割に満たなかったのは、「外国語の運用能力」10.0%、「異文化の人々と協力する能力」16.9%、「数理的な能力」18.3%、「グローバルな問題の理解」28.1%の順に少なかった。

また、知識・能力の各項目の獲得状況として[1:大きく減った][2:減った][3:変化なし][4:増えた][5:大きく増えた]の5段階と学年はいずれも正の相関関係にあり、学年進行に伴い能力・知識の20項目中16項目が有意に増

表2 学習態度の学年別評価

	学年 (n)	まったく しなかった n (%)	あまり しなかった n (%)	ときどき した n (%)	ひんばんにし た n (%)
授業課題のために図書館の資料を利用した	1 (85)	2 (2.4)	8 (9.4)	46 (54.1)	29 (34.1)
	2 (71)	2 (2.8)	8 (11.3)	38 (53.5)	23 (32.4)
	3 (79)		2 (2.5)	31 (39.2)	46 (58.2)
	4 (71)		1 (1.4)	31 (43.7)	39 (54.9)
授業課題のためにWeb上の情報を利用した	1 (86)		1 (1.2)	40 (46.5)	45 (52.3)
	2 (71)	1 (1.4)	2 (2.8)	19 (26.8)	49 (69.0)
	3 (79)		4 (5.1)	17 (21.5)	58 (73.4)
	4 (71)		3 (4.2)	33 (46.5)	35 (49.3)
インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした	1 (85)	10 (11.8)	7 (8.2)	45 (52.9)	23 (27.1)
	2 (71)	2 (2.8)	11 (15.5)	38 (53.5)	20 (28.2)
	3 (79)	7 (8.9)	17 (21.5)	28 (35.4)	27 (34.2)
	4 (71)	8 (11.3)	20 (28.2)	25 (35.2)	18 (25.3)
提出期限までに授業課題を完成できなかった	1 (86)	71 (82.6)	14 (16.3)	1 (1.1)	
	2 (71)	56 (78.9)	12 (16.9)	3 (4.2)	
	3 (79)	45 (57.0)	28 (35.4)	4 (5.1)	2 (2.5)
	4 (70)	42 (60.0)	21 (30.0)	6 (8.6)	1 (1.4)
授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした	1 (86)	1 (1.2)	8 (9.3)	50 (58.1)	27 (31.4)
	2 (71)	2 (2.8)	9 (12.7)	42 (59.2)	18 (25.3)
	3 (79)	1 (1.3)	5 (6.3)	43 (54.4)	30 (38.0)
	4 (71)	1 (1.4)	6 (8.5)	39 (54.9)	25 (35.2)
授業中、教員の考えや意見に異議を唱えた	1 (86)	58 (67.4)	24 (27.9)	4 (4.7)	
	2 (71)	43 (60.6)	26 (36.6)	2 (2.8)	
	3 (79)	30 (38.0)	42 (53.2)	5 (6.3)	2 (2.5)
	4 (71)	47 (66.2)	24 (33.8)		
授業を欠席した	1 (85)	24 (28.2)	47 (55.3)	12 (14.1)	2 (2.4)
	2 (71)	18 (25.4)	41 (57.7)	11 (15.5)	1 (1.4)
	3 (79)	13 (16.5)	51 (64.6)	15 (19.0)	
	4 (71)	14 (19.7)	42 (59.2)	14 (19.7)	1 (1.4)
授業に遅刻した	1 (84)	58 (69.0)	18 (21.4)	6 (7.1)	2 (2.4)
	2 (71)	25 (35.2)	32 (45.1)	13 (18.3)	1 (1.4)
	3 (79)	22 (27.8)	42 (53.2)	14 (17.7)	1 (1.3)
	4 (71)	24 (33.8)	31 (43.7)	16 (22.5)	
授業をつまらなく感じた	1 (86)	2 (2.3)	16 (18.6)	52 (60.5)	16 (18.6)
	2 (71)		11 (15.5)	51 (71.8)	9 (12.7)
	3 (78)	1 (1.3)	12 (15.4)	50 (64.1)	15 (19.2)
	4 (71)	1 (1.4)	24 (33.8)	38 (53.5)	8 (11.3)
授業中に居眠りをした	1 (86)	3 (3.5)	16 (18.6)	52 (60.5)	15 (17.4)
	2 (71)	3 (4.2)	13 (18.3)	45 (63.4)	10 (14.1)
	3 (79)	5 (6.3)	11 (13.9)	50 (63.3)	13 (16.5)
	4 (71)	3 (4.2)	16 (22.5)	43 (60.6)	9 (12.7)
教職員に学習に関する相談をしたり、学内の学習支援室を利用したりした	1 (86)	41 (47.7)	27 (31.4)	14 (16.3)	4 (4.7)
	2 (71)	21 (29.6)	33 (46.5)	15 (21.1)	2 (2.8)
	3 (79)	19 (24.1)	31 (39.2)	25 (31.6)	4 (5.1)
	4 (70)	7 (10.0)	30 (42.9)	25 (35.7)	8 (11.4)
単位とは関係のない教員あるいは学生による自主的な勉強会に参加した	1 (86)	53 (61.6)	24 (27.9)	8 (9.3)	1 (1.2)
	2 (71)	39 (54.9)	23 (32.4)	7 (10.0)	2 (2.8)
	3 (77)	36 (46.8)	35 (45.5)	3 (3.9)	3 (3.9)
	4 (71)	21 (29.6)	35 (49.3)	11 (15.5)	4 (5.6)
大学の教職員に将来のキャリアの相談をした（卒業後の進路や職業選択など）	1 (86)	37 (43.0)	38 (44.2)	10 (11.6)	1 (1.2)
	2 (71)	25 (35.2)	28 (39.4)	17 (23.9)	1 (1.4)
	3 (79)	14 (17.7)	31 (39.2)	32 (40.5)	2 (2.5)
	4 (71)	10 (14.1)	19 (26.8)	31 (43.7)	11 (15.5)
教員に親近感を感じた	1 (86)	24 (27.9)	33 (38.4)	28 (32.6)	1 (1.2)
	2 (71)	14 (19.7)	33 (46.5)	22 (31.0)	2 (2.8)
	3 (79)	15 (19.0)	39 (49.4)	23 (29.1)	2 (2.5)
	4 (71)	7 (9.9)	23 (32.4)	37 (52.1)	4 (5.6)

表3 知識・能力を[大きく増えた][増えた]と評価した学年別割合や獲得状況と学年の関係

知識・能力の獲得状況	学年			
	1年生	2年生	3年生	4年生
一般的な教養 *	71.0	70.0	75.9	83.1
分析力や問題解決能力 **	68.3	77.2	82.3	91.6
専門分野や学科の知識 **	93.0	97.2	96.2	100
批判的に考える能力 **	24.4	45.8	60.8	55.7
異文化の人々に関する知識	46.5	61.5	41.7	45.0
リーダーシップの能力 **	25.6	37.1	36.7	50.0
人間関係を構築する能力 **	66.3	81.5	62.0	84.5
他の人と協力して物事を遂行する能力 **	79.1	84.3	81.0	90.0
異文化の人々と協力する能力	26.8	21.4	26.6	16.9
地域社会が直面する問題を理解する能力 **	48.2	75.7	68.4	87.2
国民が直面する問題を理解する能力 **	17.4	48.6	32.9	69.1
文章表現の能力 **	47.1	37.2	59.5	76.0
外国語の運用能力	18.6	11.4	17.8	10.0
コミュニケーションの能力 **	62.3	83.1	72.2	90.1
プレゼンテーションの能力 **	48.9	42.9	57.0	77.5
数理的な能力	9.4	4.3	16.5	18.3
コンピュータの操作能力 *	77.4	81.7	75.6	87.3
時間を効果的に利用する能力 *	44.2	41.1	69.7	64.8
グローバルな問題の理解 *	12.8	24.3	29.1	28.1
卒業後に就職するための準備の度合い **	34.9	55.7	63.0	88.8

** : $p < .01$ * : $p < .05$ 能力・知識(5段階評価)と学年との相関/Spearmanノンパラメトリック検定

えていた。学年進行と有意な関係を認めなかったのは「異文化の人々に関する知識」「異文化の人々と協力する能力」「外国語の運用能力」「数理的な能力」であった。

一方、成績上位者ほど「分析力や問題解決能力」($p < .05$)、「専門分野や学科の知識」($p < .01$)、「他の人と協力して物事を遂行する能力」($p < .05$)、「地域社会が直面する問題を理解する能力」($p < .01$)の4項目が有意に増えたと評価していた。

V. 考 察

大学教育のユニバーサル化とグローバル化に対応すべく、多くの大学において、教育の内部質保証システムの構築が急務の課題となっている。それに呼応すべく、A大学においても、卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)及び入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)の策定・公表、GPA

の導入など教育改革が進められてきた⁶⁾。一方、どのような調査・研究をして、そのアウトカムをどのように活用のかなど、看護基礎教育における教学IRの役割や位置づけは、ほとんどの大学で模索している状況にある。大学IRコンソーシアムは、学士課程教育の質保証システムを進展させるべく、本格的な大規模の大学IRコミュニティを育成することを目標に活動している⁷⁾。A大学看護学科は全学生を調査対象としたが、コンソーシアムは1年生調査と上級生調査として行い、上級生調査の対象学年は各大学に任されている。2017年度は1年生調査48大学の39,808件、上級生調査44大学の42,827件である⁷⁾。

A大学とコンソーシアムを「ときどきあった」「ひんぱんにあった」「ときどきした」「ひんぱんにした」を併せた割合で比較してみると、授業経験の「実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が主体的に学ぶ」「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」「教員が提出物に添削やコメントをつけて返却」は、A大学が3割程度

多かった。また、「授業中に学生同士が議論する」は、2割程度多かった。一方、「取りたい授業を履修できなかった」は1割に満たなかったが、コンソーシアムは4割を占めている。「TAやSAなど授業補助者から助言を受ける」は2～3割であったが、コンソーシアムは4割を占めている。このことは、看護師保健師の養成施設として、保健師助産師看護師法や保健師助産師看護師学校養成所指定規則の法的規定を遵守するため、過密なカリキュラムで選択科目が少ないなどを反映した結果と受け止められる。

授業経験の「出席することが重視される」は大差ないが、学習態度の「授業を欠席した」や「授業に遅刻した」はA大学がコンソーシアムより2割程度少なかった。また、学習態度の「提出期限までに授業課題を完成できなかった」はA大学が2割程度少なかった。その背景には、A大学の厳密な出席や提出確認、課題を用いた授業展開などがあると推察できる。一方、「授業中、教員の考えや意見に異議を唱えた」はA大学よりコンソーシアムは1割程度多く、看護学生の性格特性とも考えられる⁸⁾。しかし、「授業をつまらなく感じた」「授業中に居眠りをした」はA大学の方がコンソーシアムよりやや多い。また、成績と知識・能力の獲得は関係しており、時間割の過密さや課題などの影響も考えられるが、引き続き詳細を検討する必要がある。

A大学看護学生は、学年が上がるほど多くの知識・能力を獲得していた。一方、異文化に関する知識・能力や外国語の運用能力はIRコンソーシアム加入校全体より低い状況にあり、その獲得がA大学看護教育の課題と考えられた。現在1・2年生で開講している外国語6科目と海外研修2科目に加え、異文化に触れながら外国語を運用する研修等の機会を卒業まで継続できるよう検討する必要がある。そのためには、過密なカリキュラムをより精選し、大学教育においても世代を超えた先輩・後輩との関係のみならず国内外の日常において大人と接する機会を増やす「ナナメの関係」が持てるよう⁹⁾、意図的な計画が求められる。

我が国においては、看護教育の質評価・質保証に必要な資源（人・設備・費用）等は、これ

から体制整備がされていく状況にあるが、IR機能に着目し¹⁰⁾、教育の質を客観的に保証するとともに、更なる教育改善の方策を見出すことが重要である。

VI. 結 論

大学IRコンソーシアムの標準調査から、A大学看護学科の現状や大学IRコンソーシアム結果の比較から、次のことが特徴と考えられた。

- 全ての学年で主体的に学び、看護に役立つ知識やスキルを学ぶ授業を経験している。
- TAやSAの活用は難しい現状にあるが、教員が添削やコメントなど丁寧な授業運営を行っている。
- 授業態度は悪くはないが、各学年に一定程度の欠席、遅刻、居眠りはある。
- 能力・知識の多くを学年進行に伴って獲得しているが、外国語や数理的な能力・知識は増えていない。
- 授業態度が良く、能力・知識が増えた者は成績順位上位者である。

利益相反：著者ならびに共同研究者に開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 東京大学. 平成24-25年度文部科学省大学改革推進委託事業・大学におけるIR（インスティテューショナル・リサーチ）の現状と在り方に関する調査研究報告書. 2019.08.16. http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1347631.htm
- 2) 杉田由香里. 看護系大学における保健師教育の動向. 2019.08.16. <http://www.zenhokyo.jp/insider/doc/r1-soukai-03.pdf>
- 3) 齋藤しのぶ. 看護学士課程における看護の現状と課題. 日本薬理学会誌, 2018;151(5): 186-190. 2019.08.16. https://www.jstage.jst.go.jp/article/fpj/149/1/149_4/_pdf-char/ja

- 4) 柳浦 猛. アメリカの Institutional Research IR とは何か?. 国立大学財務・経営センター 報告書, 2009 ; 11 : 220-253. 2019.08.16.
<http://www.niad.ac.jp/media/001/201802/ni005012.pdf>
- 5) 松田岳士. 教学 IR の役割と実践事例—エビデンスベースの教育質保証をめざして—. 教育システム情報学会誌, 2014;31 (1): 19-27. 2019.08.16.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsise/31/1/31_19/_pdf/-char/ja
- 6) 大学改革支援・学位授与機構. 教育の内部質保証に関するガイドライン. 2019.08.16.
https://www.niad.ac.jp/n_shuppan/project/_icsFiles/afieldfile/2017/06/08/guideline.pdf
- 7) 一般社団法人大学 IR コンソーシアム. 調査結果. 2019.08.16. <http://www.irnw.jp/survey.html>
- 8) 錦織史子, 新田弘子. 看護学生の性格特性と『情緒不安定』『社会不適応』がレジリエンスに及ぼす影響—心理的な問題を抱える学生に対しレジリエンスを高める教育とは—. 太成学院大学紀要, 2018 ; 20 : 93-100. 2019.08.16.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/taiseikiyou/20/0/20_93/_pdf/-char/ja
- 9) 文部科学省. 学校は、地域の人材を活用して「ナナメの関係」をつくろう!. 2019.10.05.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123/002.htm
- 10) 劉 文君. 日本における IR の機能 : IR 組織の設置との関連に着目し. 大学研究, 2016 ; 42 : 65-76.

The Current Status of Nurse Education at University A as Defined by Students' Experiences, Learning Attitudes, Abilities and Knowledge ; from the IR Consortium Standard Survey 2017

Minae AGO, Emiko TAKAHASHI, Masako OKAYASU,
Mikiko ODA, Hiroki KOBAYASHI, Kazuya YAMASHITA

Key Words and Phrases : Status of Nurse Education
The Universities IR Consortium
Student Survey
Education Assessment